

ほろ酔いインタビュー●佐佐木幸綱交遊録●

2017・12・24 於・佐佐木郎

〈第14回〉一九八〇年を中心に、前衛短歌の次に来るもの、富士田元彦氏の雁書館、

寺山修司の短歌批判、寺山の葬儀、『佐佐木信綱』『手紙歳時記』など

佐佐木幸綱十高山邦男・大野道夫・墨石剛仁・加古陽・奥田亡羊十森屋めぐみ

▽前衛短歌と違うものを出したい

高山 では、第十四回の「ほろ酔いインタビュー」を始めます。メンバーは前回と同じく、黒岩、大野、加古、奥田、高山の五人に加えて、森屋めぐみさんです。佐佐木朋子さんにはいつもお世話になります。年表は大口玲子さんと谷岡重紀さんのものを使います。テープ起こしは吉田瞳さんです。

『火を運ぶ』の後記に「私が小市民的な、むしろ状況との関わりを断ってゆくような

生き方をはじめたからだろうか。この間、専ら評論執筆に時間と力を注ぐことによつて、私は自身の現在を問うて来たのであった」ということで、幸綱先生は評論執筆に力を入れていた時期だったということを書いておられます。そのあたりの話をさせていただきますと思います。

幸綱 この時期は、六〇年代から続いていた「現代短歌シンポジウム」の時代の最終章というような時代になります。角川「短歌」の編集者・富士田元彦さんが六四年に交代した。それと前後して「短歌研究」が

新宿の中華料理店の経営者・小野昌繁さんを買われ、編集ががらりと変わる。いわゆる前衛短歌追放の時代というのが六〇年代後半から七〇年代いっぱいまでずっと続いたわけです。

六〇年代から七〇年代に各地で「現代短歌シンポジウム」が開かれ、『現代短歌65』『現代短歌66』『律68』『律69』『律70』といった雑誌に代わる単行本を出した。前衛短歌追放ということ自分たちが作品を発表できる総合短歌雑誌がなくなつたんで、自分たちで場を作ろう、というわ